



残すこと・伝えること

岡崎雅好



数年前に視察旅行で、ポーランド・チェコに行ってきました。

ポーランドの首都ワルシャワは、第2次世界大戦での市街戦で多くの建物が破壊されました。そして戦争が終わって、街を復興するに当たり、瓦礫を全部取り除いて全く新しい街を造るのか、それとも歴史の匂いの残る今までの街並みを復興させるのか、二者択一を迫られましたがその時に、ワルシャワの市民は古い街並みを残す方を選択しました。そしてかつての街並みが写る写真やみんなの記憶を総動員して、市民たち自らの手で一つひとつレンガを積み上げながら、壁面に残る割れ目1本に至るまで、忠実に復興させていったそうです。現在「旧市街」と呼ばれている地域がその辺りになります。

チェコの首都プラハの街も、永い歴史を感じさせるレンガ造りの美しい街並みが続きますが、その街を歩いていると、古い建物の周りに外部足場が数多く建っている光景が目につきました。レンガ造りといえども壁面の損傷は防ぎきれないようで、その建物の外壁を補修するための足場だということでした。日頃からのこうした努力で、あの美しいプラハの街並みは守られている訳です。

日本の「木の文化」に対してヨーロッパは「石の文化」であり、その材料の違いがそのまま存続性の違いだ、という言い方がされますが、東ヨーロッパの街並みを見るとき、決して石造りだから“残っている”というだけではなくて、市民の意思として“残している”のだということを強く感じました。

日本の「木の文化」の伝承といえば、昨年行われた伊勢神宮の式年遷宮があります。

これは持統天皇の御代から1300年に亘って20年に1度行われてきた神さまのお引越しで、内宮・外宮の建物のすべてを新たに造り直して、神さまにお移りいただくという儀式ですが、何故20年に1度なのか？

諸説ありますが、その中の一つに「建替え技術が伝

承されるためには、人の寿命や働く年数から考えて20年間隔が適当である」という考え方があるそうです。当時の宮大工は10歳代から見習いが始まり、50歳代になって後見として一線を退いていました。そのため20年に一度遷宮があれば、少なくとも2度の遷宮に携わることができるため、技術の伝承を行うことが可能だ、ということのようです。

わが国の明石海峡大橋は完成以来現在に至るまで、中央支間1991mを誇る世界一の吊り橋ですが、その明石海峡大橋で最後に桁の閉合作業が行われたのが平成8年9月。以来18年、わが国ではそれに並ぶ長大橋のプロジェクトは全く動いていません。

木と鉄との違いはありますが、伝承するのは“人”であることを考えれば、長大橋の技術や技能の伝承に必要な年月もまた“20年”ほどといえるのかも知れません。そして本四架橋建設当時、世界のトップレベルにあったわが国の長大橋技術を支えていた技術者たちが、現役から退き終わる時期ももうそう遠いコトではなくなっています。

いま、高度経済成長期に造られた膨大な量のインフラ資産の延命化・長寿命化が叫ばれていますが、それはあくまでも計画的な造り替えや新設までの時間稼ぎ・費用稼ぎであって、いずれ更新の時期は必ずやってきます。しかしその“治す”とは異なる“造る”ための技術や技能は、実際に造っていく中ではじめて継承されていくものでもあります。

これからの社会基盤整備をどうするのか？そこで暮らすものとして私たちは、どこまでの整備を求め、そのために自らどこまでの覚悟をするのか？それを支える技術や技能の伝承を、私たちの意思としてどう選択するのか？いまそれが問われていると思っています。

時間の流れそして技術と技能の伝承は待ったなしです。